標註 古今和歌集 上

183
2
176

東京圖書館
冊 號 架 函 類 門

和書門

宋本

生物志

自時郊京之道辛

新古今

明治十七年八月甲府客舍

書

伯爵柳原前光

標註古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者。託其根於心地。發其花於詞林者也。人之在世。不能無爲。思慮易遷。哀樂相變。感生於志。詠形於言。是以逸者其聲樂。怨者其吟悲。可以述懷。可以發憤。動天地感鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於和歌。和歌有六義。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若夫春鶯之囀花中。秋蟬之吟樹上。雖無曲折。各發歌謠。物皆有之。自然之理也。然而神世七代。時質人淳。情欲無分。和歌未作。逮于素盞烏尊到出雲國。始有三十一字詠。今變歌之作也。其後雖天神之孫。海童之女。莫不以和歌通情者。爰及人代。此風大起。長歌短歌旋頭混本之類。雜體非一。源流漸繁。譬猶拂雲之樹。生自寸苗之煙。浮天之波。起於一滴之露。至

如難波津之什献　天皇。富緒川之篇報太子。或事關神異。或興入幽玄。但見上古之歌。多存古質之語。未爲耳目之翫。徒爲教戒之端。古天子每良辰美景。詔侍臣預宴遊者。献和歌。君臣之情。由斯可見。賢愚之性。於是相分。所以隨民之欲。擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字。化我日域之俗。民業一改。和歌漸衰。然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨步古今之間。有山邊赤人者。並和歌之仙也。其餘業和歌者。綿々不絶。及彼時變。澆漓人貴奢淫。浮詞雲興。艶流泉涌。其實皆落。其花孤榮。至有好色之家。以此爲花鳥之使。乞食之客。以此爲活計之媒。故半出婦人之右。難進丈夫之前。近代存古風者。纔二三人。然長短不同。論以可辨。花山僧正。尤得歌體。然其詞花而少實。如圖畫好女。徒動人情。在原中將之歌。其情有餘。其詞不足。如萎花雖少彩色而有薫香。文琳巧詠物。然其體近俗。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰。其詞花麗。而首尾渟滯。如望秋月遇曉雲。小野小町之歌。古衣通姫之流也。然艶而無氣力。如病婦之著花粉。大友黒主之歌。古猿丸大夫之類也。頗有逸興。而體甚鄙。如田夫之息花前也。此外氏姓流聞者。不可勝數。其大抵皆以艶爲基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利。不用詠和歌。悲哉悲哉。雖貴兼相將。富餘金錢。而骨未腐土中。名先滅於世上。適爲後世被知者。唯和歌之人而已。何者語近人耳。義慣神明也。昔平城　天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歷十代。數過百年。其後和歌弃不

被採用。雖風流如野宰相。輕情如在納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。伏惟陛下御宇。于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之頌。洋々滿耳。思繼既絶之風。欲興久廢之道。爰詔大内記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河内躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各献家集。並古來舊歌。曰續萬葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勒而爲二十卷。名曰古今和歌集。臣等詞少春花之艶。名竊秋夜之長。況乎進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。適遇和歌之中興。以樂吾道之再昌。嗟乎人丸既沒。和歌不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等謹序。

標註 古今和歌集序

やまと歌は。ひとつ心をたねとして。よろづのことのはとぞなれりける。よは中にある人。ことわざしげきものなれば。心に思ふことを。見るきくものにつけていひいだせるなり。花なき鶯。水にすむ蛙の聲をきけば。いきとしいけるもの。いづれか歌をよまざりける。ちからをも入れずして。天地をうごかし。めに見えぬ鬼神をも哀れとおもはせ。をとこ女のなかをもやはらげ。たけきもの〻ふの心をもなぐさむるは歌なり。このうたは。ちからをいれずして。天地をうごかし。めに見えぬ鬼神をも哀れとおもはせ。をとこ女のなかをもやはらげ。たけきもの〻ふの心をもなぐさむるは歌なり。

心ときがさかりけらし』ひとの代となりてすさまじのみことよりぞ
みそもじあまりひともじいよみける』かくてぞ花をめで。鳥をうらや
み。霞をうたもれと。露をのあしふ。心詞おかくさま〳〵になりゐける』遠
き所もいでゐつゝあしもとよりはじまりく年月をわたる。高き山もふも
とにたちをひおよりなりて。天雲たな引までおひのぼれる如くに。この歌
もかくの如くなるべし』なにもつけ歌いみかどの御むじえあり。あさ
か山のおとの葉いうねめけたもふれよりよみて。このふた歌い歌は父
母のやうにてぞ。手ならふ人のむじめゐもおける』うを〳〵歌乃さま
六つなり。からけ歌にもかくぞあるべき。其六くさけひとはゐいそへ歌。
ふさつにをかぞへ歌。みつにいなぞらへ歌。よつにいたとへ歌。いつゝに
いゐだこと歌。むつゐいもひ歌なり』今は世の中いろにつき。人の心
花ゐなりにけるより。わだなる歌。むのあよ事のこいでくれば。いろこの

みの家ゐうもれ木の人おもぬことゝなりてまめなる所にい花すゝき
はにいだすべき事にもあらぬおりにさり』其むじめをおもへばかゝ
るべくなむあらぬ』いにしへのよゝけみのど春の花乃わした。秋の月
の夜ことにさぶらふ人こをめしくあとに円けつゝ歌を奉らしえ給ふ。
あるい花をこふとて。たよりなき所ゐまどひあるい月を思ふとて。おる
べなきやみゐたどれる。心こをえ給ひて。さのしおろかありとおろしえ
しけむ』おのあるけこにあらぬさざれ石ゐたとへ。ぬくば山にのけて
君を祝のひよろとひ身にすき。たのしみ心ゐあまり。ふじけ煙によそへ
て人をこひ。松虫の音に友をおのび。高砂住江の松も。あひおひのやうに
ねゐえをとこ山け昔を思ひいで。をこなへしけひとゝきをくねるにも。
歌をいひてぞなぐさめける』また春のあしたゐ花のちるをえ。秋の夜
に木のもけおつるをきゝ。あるい年毎にのがみの影ゐえもる。雪と浪と

をなげき。草の露水のゐるを見てこがゝ身をおぞろきゐるハきのふハさかえおごりてけふハ時をうしなひ世おとびてゐたしのりしもうとくなりゐるハ松山の浪をゝけ野中ハ水をくみ秋もぎ乃下葉をあがめゐかつきのゐぎのもねがきをのぞへゐるハ呉竹のうきふしを人にいひよしハ川をひきてよの中をうらみきつるにいまハふじの山もけふりたゝぎなりながら乃橋もつくるありときく人ハ歌おのゝぞ心をなぐさめける』 古しへよりかくつたもるうちにもかきれ本の人まろなむ歌のひゞをなりける。また山部の赤人といふ人ありけを。歌にあやしくたへなりけを。人まろハ赤人が上おたゞむことかゝく。赤人ハ人まろが下にたゝむことかゝくなむ有ける』 この人ゝをたきてまたすぐれたる人をくれ竹のよゝにきこえのゝ糸のより〳〵にたえぎぞありける』 是よりさきの歌をあつめてなむ萬葉集と名つけられたりける』 彼御時より此かた年ハ百とせあまり。よはとつきになむありおける』 こゝに古しへハ事をも歌の心をもゐきる人。わつゝにひとりふゝをなりき』 ゐのもゐをもこれかきえたる所えぬ所。たがひになむある』 いま此ことをいふに。つのゝ位高き人をば。たやすきやうなをばいれぎ。其外に其名きこえたる人ハ則。僧正遍昭ハ。歌のさまをえたれどもまことすくなし。たとへばゐにのけるをうなを見ていたづらに心をうごゝすが如し』 在原の業平ハ。その心あまりてことばたらぎいとばゐぼめる花のいろなくて。匂ひのこれるがごとし』 文屋の康秀ハ。詞たくみおてうれさま身におはぎいとばあき人のよき衣きたらむが如し』 宇治山の僧喜撰ハ。詞ゝすゝにしてもゞめをはりたしかあらぎいとば秋の月を見るに。暁の雲にあへるが如し』 小野の小町ハ。其心あもれなるやうおてすがたつよからぎいとばよき女のなやめる所あるにおゝり』 大友の黒主

ハ。心やさしくて其さまいやし。いもばたき木おへる山人は。花の影にやすめるが如し』此外の人〻其名きこゆる。野べゐおふるゥつらのはひひろこりむやしにおげきおれもの如くにおほのれど。歌とのゝおもひて。其さまおらぬなるべし』かゝるにいますめらきは。天の下おろしゑすこと。よつ乃時こゝはかへりになむ成ぬる』ゆまねき御うつくしみの波。やしまは外までながれ。ひろき御めぐみの影。はくば山のふもとよりをおげくおはしまして。よろづのまつりごとをきこしめすいとまも。ろ〳〵は事をもすて給はぬあまりに。古しへの事をもゑすれど。ふりにしことをもたこし給ふとて。今も見ろなはし。後の代にもつたへとて。延喜五年四月十八日に。大内記紀友則。御書所の預紀貫之。前甲斐のさう官凡河内のゝつね。右衛門の府生壬生忠峯らにたはせられて。萬葉集にいらぬ古き歌。ゝづゝらのをも奉らしゑ給ひてなむ。夫が中にも。梅をかさすよりはしめて。郭公をきゝ。紅葉を折。雪をゑるにいたるまで。又鶴龜につけて君を思ひ。友をもいもひ。秋もぎ夏草をゑてつまをとひ。逢坂山にいたりて手向をいのり。わるゝ春。夏。秋。冬ゐもいらぬくさ〳〵は歌をなむえらはせ給ひける』すべて千歌廿卷。名づけて古今和歌集といふ』かく此度あつめえらばれて。山下水のたえぎ。濱のまさごは數多くはもりぬれば。いまハあすか川は瀬ゐなるうらみもきこえぎさゝれ石のいはゐとなるよろこびのゝぞゆるべき』それかしら詞ハ春は花の匂ひすくなくして。むあしき名のゝ。秋の夜はながきをのことてれば。かつハ人の耳におそり。ゥ月ハ歌の心にはぢおもへど。ゐなびく雲のたちゐなく鹿のおきふしをつらゆきらが此世ゐ同ぢく生れて。おれことの時にあへるをなむよろとびぬる』人まろなくありゐたれど。歌のことゝどまれるかな。たとひ時うつり。事さり。たのしみ。かなしゝゆきのふとも。

此歌ハもゝ青柳のいとたえぬ。松の葉乃ちりうせぬして。まさきのつら長くゆたかなり。鳥乃あと久しくとゞまれらば。歌のさまをもあらり。ことの心をえたらむ人ハ。大そらハ月を見るが如くにいゝわしへをわふぎて。いまをとひざらえかも』

右ハ難波本と景樹本とを考へわかせて我師堀大人が定められたるによりつ

例言

一世にありふれたる本ハ文字の誤れる假字のたかへるあまたありて家の兒等あをしふるにも便りなしければろをら正してむとてものしたるをこたび人ゝすゝめによりくすゝ卷となしつ倘いたらぬふしもなからむ見む人えりさだめてよ

一古くより傳れる本の注釋ハなへて省きつゐだ題中の名義事實と歌主の年代系譜のみを題末或ハ頭書に加へつ

一歌の意ハ遠鏡によりて大ゝ的ゐハをらるべければ〻

にハあべてもれせす

一假字序ゐハ古くより佗し詞のましれるわまゐのをと
く近世大人たちの説おのれたるによりて今は原文の
みを擧けつ見む人已がさのしらこゝろゐえりすてた
をとな咎ゑそ

一序文の大小段落ハいさゝか章法のあるところを曉り
やすからしめむとて記しつ

標註古今和歌集卷第一

内藤萬春子 標註

春歌上

在原元方

ふるとしに春たちける日よめる

ふるとしは今年に成て去歳を云是は都て今年の哥なれは仮に古歳といへる也
扨凡春立日とは天の道の春立也正月元日を春の始とするは大君の御定め也次
の詞書に春立日とは正月元日を賞して詠し哥也正月に成ての立春は賞するに
足らざれはにや古來より見えす萬葉二十に寶字元年十二月十八日に三形王の
よまれたる哥「み雪ふる冬はけふのみ鶯のなかむ春べはあすにし有らし」十
九日立春成けるにや同廿三日家持「月よめはいまた冬なり去かすかに霞たな
引春立ぬとか」

年の内に春はきにけり一とせをこぞとやいはむとしとやいはむ

紀貫之

春たちける日よめる

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

○元方ハ業平朝臣の孫棟梁の男也といへり

○貫之ハ官位は此序に御書所の預作者部類に天慶八年三月廿八日任木工頭同九年

卒す新選和哥集の序に玄蕃頭從五位下と見へたり

○清和天皇の皇后贈太政太臣長良公の女陽成天皇の御母諱高子と申奉る

○素性ハ秩禄略記に遍昭僧正在俗の時の子と

題しらず　讀人不知

題も作者もしれぬをかくしるされしも也是に後世歌の傳とて題の意を云作者は誰也と云皆作り云也といへり又官位高き人勅勘の人賤數人などをは讀人不知と出ると云も僻事也官位高きは大政太臣左右太臣をも載勅勘は司解たるも賤數は遊女も見えたり

春かすみたてるやいつとみよし野の吉野乃やまに雪ハふりつゝ

二條のきさきの春のはつめの御歌

雪のうちにはるハ來にけり鶯のこほれるなみだいまやとくらむ　讀人不知

題しらず

梅がえにきゐるうぐひす春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ　素性法師

雪の、木にふりかゝれるを、よめる

春たてば花とや見らむしらゆきのかゝる枝にうぐひすのなく　讀人不知

題しらず

心ざしふかくそめてしをりければきえわへぬ雪の花と見ゆるか

あり大和物語に遍昭のとを云にこゝにいますかりける時の子ともありけり太郎は左近將監とけて殿上ーて有けりかく世にいますかりときく時だにとて母もやりたりければ

二條の后の、東宮の御息所ときこえける時、正月三日、おまへにめして、はなせごとある間だに、日ハ光りながら、雪の頭に降りかゝりけるを、よませ給ける　文屋康秀

東宮之御息所とは東宮の御妻の事也然共此后は清和天皇の皇后陽成天皇を生給ひて此皇子即東宮に座すを東宮の御息所と申也源氏物語にも東宮の御母を東宮の女御共右太臣の女御とも常の詞に申ならはせし也

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき　きのつらゆき

雪のふりけるを、よめる

かすみたちこのめも春の雪ふれば花なきさとのはなぞちりける　藤原言直

はるのはゝめに、よめる

はるやときはなやおそきとゝかむ鶯だにもなかぬ有かな　壬生忠峯

春の始のうた

春きぬとひとはいへども鶯のなりぬかぎりハあらじとぞおもふ

いきたりけるに法師の子は法師成ぞよきとて是も法師になりてけり云云

○當純ハ近衛右大臣の男也

○友則ハ父は宮内少輔在官也官位は五位

○千里ハ參議音人の子也本は大枝と書たを貞觀年中奏して大江と改む

○棟梁ハ業平朝臣の男拾芥抄に左兵衛佐筑前守從五位上と在

○行平ハ阿保親王之子天長三年在原朝臣の姓を賜ふ仁明天皇よ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　源當純

寛平は宇多天皇の年號也后宮は七條の后温子を申奉る昭宣公の御女也此宮の歌合の歌共は新撰萬葉集に有を此集には採られし也歌合は歌詠人を左右に立て勝負を定させらる

谷風にとくるこゝろのひまごとにうちいづるなみや春のはつ花　紀友則

花の香を風の便りにたぐへてぞうぐひすさそふたるべにはやる　大江千里

うぐひすの谷よりいづる聲なくは春くることをたれかたらまし　在原棟梁

はるたてど花もにほはぬ山さとは物うかるねにうぐひすのなく　よみ人しらず

題しらず

乃べちかくゝへるしせをば鶯のあくなることはわさなさなれく　よみ人しらず

春日野はけふをなやきそ若草のつまもこもれるとしにぬるを

春日野のとぶひ乃野もり出て見よ今ゝをりあをて若なつみてむ

みやまには松のゆきだにきえなくに都は野べ乃とかなつみけり

梓弓れしてはるさめふりぬわすさへふらばとかな川みてむ

仁和の帝みことみれまし〳〵ける時に人ゝ若菜賜ひける御歌

光孝天皇仁明天皇第二子御母皇太后澤子贈太政大臣總繼公の御女也諱は時康親王みこにておはしましける時に誰にても春菜を賜ひし時の御歌也

君がためはるの野に出てゝかなつむとゝが衣手にゆきはふりつゝ　つらゆき

歌奉をと、仰せられし時、讀て奉をる

是は此撰集の時に奉るにあらず何にてもよみつる歌あらむを奉れとの仰せ事也下に餘多みゆ皆同し

春日野のわゝなつゝにやゝろ妙のそでふりはへて人のゆくらむ　在原行平朝臣

題しらず

はるのきる霞のころもぬきをうすゝ山風にとそみだるべらなを

り宇多天皇まで六代の朝に仕へて經濟の才且風流の聞えあり仁和三年四月十三日致仕寛平五年薨す

○宗于、光孝天皇御孫是忠親王の子なり拾芥抄に右京大夫正四位下天慶

■寛平御時、きさいの宮の歌合に、よめる　源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

歌奉れとのたまはせし時、よみて奉る　川ら ゆき

我せこが衣はるさめふるごとにのべのみどりぞいろまさりける

青柳のいとよりかくる春ごとにみだれてはなのほころびぬける

西大寺のほとりの柳を詠める　僧正遍昭

羅城門の外の東西に稱德天皇天平神護元年大利を立らる是は西の大寺也昔は都の大道に柳を多く植られたり其西寺の邊りの柳を愛て〜よめる也

わさみどりいとよりかけてたれか露を玉にもぬける春のやなぎか

題しらず　讀人不知

もゝちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

遠近のたつきもしらぬやまなかにおぼつかなくもよぶことどりかな

雁の聲を聞て、越へ罷をける人を思て、詠る、凡河内躬恒

二年卒す

○遍昭、桓武天皇の御孫大納言良峯安世の男俗名宗貞若き時は仁明天皇に御身近う仕へ奉りて崩御の後出家して陽成の御時權僧正に任ず光孝の御時僧正に轉任せ

雁は春歸り秋きたる寒き國に住といひならはせる故越國に行〜我友にことつてせよとなり

春くれば鴈かへるなりしらくもの道ゆきぶりにことやつてまし

歸鴈をよめる　伊勢

春がすみたちにしをれ捨てゆくかりを花のあるじとおれみやならへる

題しらず　讀人不知

ををつきばかりとやこゝにうぐひすのあくをつきばかりとやこゝにうぐひすのあく

色よりも香こそあはれとおもへれ花ぞ袖ふれしやどの梅ぞも

やどちかく梅花うゑゝ所ぞおきあくまで人の香ゆゑやとまるぬる

うめの花立よるばかりあるをしより人のとがむる香ゆゑぞ知ぬる

梅の花を折て、よめる　東三條の左のおほいまうちきみ

うぐひすの笠にぬふてふうめの花をりてかざさむ老のくるやと

られ宇多の御宇の始に入滅せらる中間雪林院に住其後花山寺を立て住れしより云て花山の僧正と申せしなり

○みつね 大押氏と河内氏とを二つ合せてとなふる氏也躬恒は此序に甲斐の少目と見え後撰には御厨子所の預とみゆ

○伊勢 伊勢守繩(ツキ)の女(メ)にて伊勢とよべり七條后に仕へて宋に宇多上皇の皇子を產奉りたかは伊勢の女御とよべり

題しらず　素性法師

よそのみにはるはきにけりうめのはなあやめもぬ色香はなつかしき

梅花ををりて人のおくりける　とものり

君ならでたれにかみせむうめのはな色をも香をもしる人ぞしる

くらぶ山にて、よめる　はるゆき

うぐひすの花の匂ふ春べはくらぶ山やみにこゆるをぞしるべき

月夜に、梅花を折りてと、人のいひおこせば、をりて、よめる　ミ　ね

月夜にはうめとも見えぬ梅の花香をさづねてぞしるべかりける

春の夜、うめの花をよめる

春のよのやみはあやなし梅の花色こそみえね香やしるべき

初瀬にまうでるごとに、宿りける人の家に、久しくやどらで、程へて後に至りければ、かの家の主かくさだりにあむ宿りに有ると、いひ出して侍りければ、うとみたてまつる梅の花を折て、よめる　ゆき

古へは初瀬寺に人多く詣て願立る事故貫之も度々詣られしに故(ゆえ)より寄りたる宿に久數宿らで程へて後宿らむ由を云入たれは主の詞にかくさたかになむとはよく門をもたかへ給はで宿らむとは云入給ふよと餘りうと〳〵敷をかすりて云たるに願てそこに立てる花を折て歌を詠結び付てこたへられしなり

人はいさこゝろもしらず古さとは花ぞむかしの香にほひける

水のほとりに、梅花のさかりなりけるを、よめる　伊勢

水の邊りと云詞如何歌にはながるゝ川とあれば川を水に寫しあやまるにやと思へど伊勢家集に此歌の端書に京極の院に亭子の帝(おほいきさき)御坐て花の宴せさせ給ひ參れと仰られしに參りて池に花など敷たるをみて迎前後二首共に有池をも川とよむ事有や萬葉には廣き池を海とよみしはあれど川と詠しはなしと餘財に見へたり

春ごとにながるゝ川をはなと見くをら花ぬ水あろでやぬをあむ
年をへる花のゝが苏とあるをづハちをかゝるをや曇といふらむ

家あ有れる、梅花乃ちをあるを、よめる　貫之

くるとゝをとめが花ぬ物を梅花ゆにのをとまにう川ろひぬらむ

寛平御時、ゆさい乃宮の歌合のうた　よ乃人おら安

梅が香を袖あう閉しをとどめてば春ハすぐとをゝさ乃ならまし

素姓法師

ちるとをゝをゝるべよ物をうえの波なうさく匂ゑ乃袖あとまきる

題おらず　よ乃ゑとおら安

ちをぬとを香をだあ殘せうえのはな戀おき時のれをひ出あ拾む

人の家あ、植さをあるさくら花、さき始めたりれるを乃く、

よめる　貫之

○東三條の左のおほいまうち君ハ長房公なり諡忠仁公と申奉る後に昭宣公も太政大官と成賜ひゝ故さきのとことわられゝ也

○さきのおほきおほいまうち君ハ良房公なり諡忠仁公と申奉る後に昭宣公も太政大官と成賜ひゝ故さきのとことわられゝ也

ことしより春おをそむる櫻花ちるとゆふことハならをざらなむ

題おらず　讀人不知

山たゝみ人をすさめぬをくら花いさをなわびぞとを見はやさむ

山さくらをが見あく紙ばはる霞をねにをあもたちかくしはゆ

染殿の后乃たまへあ、花かめに、櫻花ををさせたまへるを、

さよ乃たゆきたゆいまうちきを

とく、よゑる

染殿の后明子文德天皇之皇后淸和天皇之御母良房公の御女母嵯峨天皇之皇女潔姬染殿は正親町の北京極之西に有本良房公のれはせゝ家也こゝに住せ給ひしより染殿と申奉る花瓶は枕双紙に面白く咲たる櫻を長く折て大成花瓶にさゝたるこそれかゝけれ又高欄の本に靑き瓶の大成すゑて櫻のいみ玄う面白き枝の五尺斗り成をいと多くさゝたれば云云

年ふきばよはゆを老ぬをかハ乃紙ど花をしをれば物思ひをあし

渚の院あて、櫻をみてよめる　在原業平朝臣

渚の院は河内國交野郡に有惟喬親王おはしまし〳〵こゝに出て遊びませ〻り處也

よのなかにたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

讀人不知

題しらず

いはしるたゝなくもがな櫻花たをりてもこむ見ぬひとのため

うせい法師

山の櫻をゝく、よめる

みてのみやもとにゝさらむ櫻花手ごとにをりていへづとにせむ

花ざかりに、京を見やりて、よめる

見わたせば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける

櫻花のもとにて、年の老ぬるを歎きて、よめる、紀友則

色もかも昔ながらにさくらゝんとしふるひとぞあらたまりける

をゝる櫻をよめる

たをしゝもとめてをつるはる霞立ちをゝらむやまのさくらを

歌たてまつれと、仰らをし時、よゝく奉れる

さくら花をゝにおらしをなのし曳乃山のかひよをみゆるおらをも

とをのをを

寛平御時、きさいの宮の歌合のうた

みよし野のやまべにさかりる櫻花ゆきかとのみぞあやまたをける

伊勢

やよひ、うるふ月の有ける年、よゝける

明治五年十一月大陰暦を廢し大陽暦を用ひ給はむとの詔有て同十二月三日を以て明治六年一月一日と御定め給ひしかは四歳毎に二月廿九日有其前大陰暦を御用ひ有し時は三年目毎に一月を増也是は三月の閏月なり

さゝら花はるくはなれるとしたふをひとの心にあかれやをせぬ

櫻の花の盛をに、久敷とはざりける人の、來さりける時に、詠る

讀人不知

わだなをと名ふことをたてゝ櫻はなとしにまをなる人をまをけを

返し

業平朝臣

けふこそばゆきにハ雪とも降なましきえぬ物とハ花とみましや　讀人不知

題しらず

ちりぬればこふをぞしるしなき物をハふこう櫻をらばををてん

をりとらばをしげにもあるゝ櫻花いざやどかをてちる迄ハ見む　紀在友

○在友ハ一說に友則の父也といハり

さくら色に衣ハふゝくゝめてきむ花のちりなむのちのかゝみに

櫻の花のさけりけるを、見にまうで來たりける人ゝ、よみて送をける　三川掾

わがやどの花見がてらにくる人をちりなむのちぞ戀しゝるべき

亭子院歌合の時、よめる　伊勢

亭子院は宇多天皇の下居(おりゐ)給ひて始は朱雀院に御坐(おはしま)し又亭子院を造らせまして

そこにおはしけるを申歌合は前にいへり

みる人もなき山をとのさくら花ゝゝのちりなむのちぞさかまし

標註古今和歌集卷第二

春歌下

題しらず　讀人不知

春かすみたなびく山のさくら花うつろはむとやいろかハりゆく

まてといふにちらでしとまる物ならばなにを櫻ゝ思ひまさまし

のこりなくちるぞめでたき櫻花ゝをて世のなかはてのうければ

このをとにたびねをぬべし櫻花ちりのまがひゝへおをすれて

う川せをのよにをゝるか花櫻をくとみしまゝかつちりにをを

僧正遍昭ゝ、よみてたくをける　こをたゝのみこ

さくら花ちらばちらなむちらずとを故郷ひとの來てゝゝ見なをに

雲林院にて、櫻花の咲けるをみて、よめる　承均法師

○これたかハ文德天皇第一皇子母は

正五位紀師子貞觀十四年七月出家法名算延寛平九年二月廿日薨す小野に隱まーける故に小野の宮と申奉る

雲林院は今の京の北紫野に有其始は淳和天皇の離宮にて天長九年こゝに幸有雲林亭と名付られたり其後承和十年の幸には雲林院と紀に見へさて常康親王に賜ひーを親王出家ーたまひて後こゝを遍昭に讓給へり

さくらちる花のところは春ながら雪ぞふりける消えがてにする

櫻花の散侍けるを見て、讀る　素性法師

花ちらす風のやどりはたれかたる我おとしへよゆきてうらみむ

うゑん院にて、櫻花を、よゑる　ぞうぐ法し

いさ櫻ゑまもちゑなむひとさかりのゑない人おうゑめゑえなむ

相知ゑける人の、詣できて、歸にる後讀て、花おさしてつかはしける　川らゆき

相知れる人とは心あふ友等なるべーし紙を書たる紙をたゝみわけて枝に其わけめを挿たるを云付てと云も似たる事ながら夫は紙よりにても糸にても結ひ付たるを云

ひとゑ見し君をやくるとさくら花けふい待みくちらはちらなむ

○因香ハ三代實祿元慶二年散事從五位下藤原朝臣因香爲權掌侍ニと見えたり其後典侍に成ーならむ典侍は四位なれば姓を下に書也萬葉と

山のさくらを見て、よゑる　藤原因香朝臣

春かすみなにりくにらむ櫻はあちるまをだにも見るべきものを

心ちそこなひて、煩ひける時に、風おのさらゞとて、れろしあめくりと侍るおひだあ、をれる櫻の、散りさになる紙をけるを見く、よゑる

こゝちは心もちのもをはふきたる也煩ひは惱と云が如ー卸しこめは惟凡帳などを卸し垂たらむを云折れる櫻は瓶にさーたるをいへり

たれこめて春乃行へをゑらぬまに待しさくらもうつろひにけり

東宮雅院にて、櫻の花の、みゝい水にちりてながれるを見く、よゑる　菅野高世

雅院は東宮の御元服立太子の元服の座をもこゝに儲け又御宴などの所ともする也御溝水は御殿共の軒を流るやり水也

枝よりもあだにちりおし花なきばれちをも水乃わいところなれ

此集は四位の人は必ず云かしるせり古へい女もかくしるせる例なり

○高世ハ延暦九年七月津の廳を改て菅野の朝臣の氏姓を賜へり高世は其子孫なるへし

さくら乃花の散けるを、讀る　つらゆき

ことならばさりはやハ乃らぬさを花そる我さへに云ひ心なし

櫻乃ごと、とくちる物はなしと、人のいひけをば、よめる

さくらはなとくちをぬともはえす人の心ぞ風をふきの乃へぬ　紀とも乃を

さくらの花乃散を、よめる

久かさ乃ひりのどけき春乃日にあづあ丶ろなく花のちるらむ　藤原乃よしりせ

春宮乃帯刀の陳にて、櫻花の散をよめる

帯刀の陳とは帯刀舎人と云て宿直をし種々の事にも奉仕武士の集る所也平城の頃迄は餘多有しを延喜の春宮には三十人と式に見えたり夫等が集り居所を陳と云禁中にては瀧口と云春宮にては帯刀院にては北面と云皆同し武士也

春風を花乃ゆきりをよぎてふけこ丶ろづりらやう川ろふとをむ　凡河内をつね

さくらのちるを、よめる

雪とりをふるだにあるをさくら花いりにちをとか風のふくらむ

ゆえに乃ゆりて、りへををうてきく、讀る　はらゆき

山たりゐみは川をがこしさくら花風をこ丶ろにまりはへらなり　大伴くろぬし

題をらを

春さめ乃ふるハなみだりさくら花ちるををしまぬ人をなを紙ば　はらゆき

亭子院、歌合乃うを

さくらはなちをぬる風のなごりゐは水あをそらに波ぞをちける　讀人不知

題をらを

ふるさとと成にしならのをやこにも色ハかはらを花ハさきけり　良峯宗貞

春乃歌とて、よめる

花のいろりはをにこえくみせを香をだにぬすめ春の山風　素性法師

寛平御時、ひさい乃宮の歌合のうを

花の木を今ハ乃をうゐ春をそばうつろふいろに人ならひけり

○黒主ハ近江國の卜部か後撰に志賀の辛崎に祓しける人の下つかへに見る云云近江志賀郡大友郷より出たる人にて大友氏なるべし大伴

と書は誤と打聽に見えたり

○宗貞ハ遍昭俗の時の名なり

題しらず　よゝひとしらず

春乃色のいたり至らぬ里はあらじさけるをりざる花のみゆらむ

はるの歌とて、よめる　川らゆき

みゝ山をゝりをかくすゝはるかゝゝ人にゝらをぬ花やさくらむ

うゐん院のみこの御もとに花見ゝきた山のほとりにまかをを

ける時に、よゝる　そせい

雲林院は前にいへり親王は常康親王仁明天皇の御子也此北山は平野の社の北に大北山小北山と云村有其あたり雲林院に近し

いざけふゝ春の山邊にまゝをなむくをゝばなげの花のかげゝハ

はるのうたとて、よめる

いつまでか野べに心のゆくが紋む花しちらずば千世もへぬべし　よみひとしらず

題しらず

春毎に花のさゝをハゆりなえぞわひ乃むことゝいのちゝをけり

花のごとよ乃常ならばすぐしてしむゝしゝ又をかへりきなまし

吹風にゆゝらへつゞるものならば此一もとハよぎよといはまし

まゝ人もこぬものゆゝにうぐひすゝあよつる花を折くゝるゝな

寛平御時、ゆさいの宮乃歌合のうた　藤原興風

さく花ハちぐさながらにわだなをゝ誰ゝハ春をうらみはくゝる

春がすゝいろ乃ちぐさに乃えつるハたなびく山乃花のゝげゝを

かすみたつ春の山べゝとゝけ紋ぞふきくるゝ拾ハ花の香ぞ紋る　在原元方

うゝ川ろへる花を見て、よめる　ゝ川秋

花ゝをばこゝろさへにぞうつをける色にハいてゝ人をこそゝれ

題しらず　讀人不知

うぐひゝ乃なく野べごとにきくゝればうゝ川ろふ花に風ぞ吹ける

○興風ハ拾芥抄に參議濱成の孫道成の男號院の廉太下總權大掾延喜十一年相模掾從五位下と見えたり

○治子ハ參議春澄朝臣善繩女也掌侍にて從五位貞觀十二年二月十九日參議從三位春澄朝臣善繩薨す長女治子爲二正四位下典侍一云云

○後蔭ハ延五の記の注に瀧人右中將中納言有種の子とみえたり

○小町ハ出羽の郡司が女也といへどたしかにはいひかたし

吹風をなさてうらゝかようぐひすはこれやい花にてだゝふきさる

典侍治子朝臣

ちる花乃なくにしとまる物ならば我うぐひすにたとらましやい

仁和の中將のみやすむ所の家ゝ、歌合せんと、をける時に、

藤原後蔭

よめる

仁和の中將は光孝天皇の御時中將の御息所と云が在て其家に歌合せんとしてゝ人々に歌よませしかどさる故の有てかせず成しによりてせんとしける時にと書り

花乃ちることやわびしき春がすゝ立田乃やまのうぐゐすのこゑ

うせい

鶯乃なくを、よめる

木づたへばをのがは風ゝちる花を誰におゐせてゝゝらなくらむ

鶯の、花乃木にくなをを、よめる

ゑ門孫

ゐるしなはねををなくゝな鶯乃こゝとしのこちる花ならゝくに

題ゐらぎ

讀人不知

とまなべていざゝんゝゆゝむ故郷ハゆきとのこゝろ花はちるらゝん

ちるはなをゐゝゝうらゝんむ世中に我身もとをにゐらむものゝい

小野小町

花乃色ハ移をにゐりないさゝらに我身世にふるゝがめせしまゝ

仁和乃中將のみやすむ所の家に、歌合せんとゐゐる時に、

よめる

うせい

たしと思ふ心ハいとによらきなむちる花ごとにぬきてとどめむ

志賀乃山越にく、女の多くゐへをけるに、よみてにゝはしける

にゝゆよ

志賀の山越は今の京成北白川の瀧のべより登りて如意が嶽を越て近江の志賀の崇福寺へ詣る迎女房共の此山を越て行か又行手の面白き山路なれゞ水海なども見る迎行にやあらむ昔行かひ多かりしと見へたり

ゆづさ弓はるの山べをおえくれば道もさりあへぬ花ぞちりける

寛平御時、ひさいの宮の歌合のうた

春の野にひゝなにまむとおしものを散らふ花にまちはまがひぬ

山でらにまうでたりけるゐ、よめる

やどりして春の山べにねさる夜い夢のうちにもはなぞちりける

寛平御時、きさいの宮の歌合のうた

吹かせとさにの水としあかりせばみやまがくきの花をゑましや

ゐゝより返をける女どもの、花山に入て、藤の花のもとに立寄て、ゝへりけるに、讀くれたくりある　僧正遍昭

遍昭花山寺に住れ〳〵時志賀詣〳〵て歸りける女房共の山越はせで志賀より打出の濱を經て逢坂山を越京へ歸る迎山科の花山寺へ立寄たる也

よそにゑくゝへらむ人に藤の花はひまにはれよとゝむまをだゐ

家に、藤の花さけをゐるを、人のたちとまりてみけるを、よめる　みはら

我宿にさけるふぢなみさちゝへをすきがくにゝゝ人のみゆらむ

題ゐらず　讀人不知

いまもかをさひ匂ふらむさち花ゐしまのさよの山ふきゝ波なはるさめゐ匂へるいろもゝなくに香さへなにゝし山ふきゝ花

山吹をわやなくさきそ花をむとうへけむきみがとよひゐあくゐ

吉野川ゝ邊りに、山吹の咲りけるを、詠る　にらゆよ

よし野川きしゝ山ふきふく風にそこゝゝげさへうにゝひゐけり

題ゐらず　よみびとしらず

かはづなくゐでの山吹ちをにはり花ゝさゝをにゝはいましものを

春の歌とて、よめる　ゝせい

思ふどち春乃山べにうちむれてうことゝもいはぬたひねしてをか
はるのとくすくるをよめる　　みつね

ゆつさ弓春さちしよりとし月乃いるがごとくもたをほゆるかな
やよひふ、鶯乃聲の、久をう聞へさりけるを、詠る、貫之

鳴とむる花しなければうぐひすもはていをのうく成ぬへらなり
やよひ乃つごもりかさに、山を越けるに、山川より、花のながき
けるを、よめる　　深養父

花ちれるこつ乃まふさにとめくれば山にハ春もなくありふけを
春ををしゝて、よめる　　をとかた

をしめどもとどまらあくに春霞かへる道ふしさちぬとたをへば
寛平御時、きさい乃宮の歌合のうた　　たよかせ

聲たてゝなけやうぐひす一とせに二さびとだふくべき波るかは

彌生乃晦の日、花つゝより歸をける女共をみて、詠る、凡河内

彌生晦の日とは三月三十日の事只晦頃といへるは二十日過より三十日迄の間をいへる也物語書に多くみゆ花つみとは二三月頃野山に往て花をつみて先祖の墓を祭る事也神代記に伊邪那岐伊邪耶美の二神を祭り奉るにも花の時には花を以て祭ると云事是也

とどむべき物とハなしふはかなくも散花ごとにたぐふあゝろか
やよひのつごもりの日、雨乃ふりけるに、藤花を折く、人ふつか
ハしある　　業平朝臣

ぬれ門つそをひて折ける年の内に春ハいくかをのらゞと思へば
亭子院乃歌合に、春のはて乃うゝ　　こ門　孫

けふ乃こゝとはるを思ハぬ時だふもたゞことやすき花のかけかハ

標註 古今和歌集卷第三

夏歌

題しらず　　讀人不知

我やどの池の藤なみさきにけりやまゐとゝぎすいつかきなくむ

うづきにさける櫻をゝて、よめる　　紀としさだ

哀てふことをあまたゝびやらゞとや春にたくれてひとりさくらむ

題しらず　　よみ人しらず

さつきまちやま時鳥うちはぶきいまもなくあむあぞのふるこゑ

さゐまことばなまるふをなむ郭公まだしきゐどのこゑをきくばや　　伊勢

讀人不知

さつきまちは花ゐちばなの香をゝげハむゝしの人の袖の香ぞする

いつの間にさ月きぬらむ足曳のやまほとゝぎすいまぞなくゐる

けさよなきいまだ旅ゐるゐとゝぎす花たちばなに宿をからなむ

音羽山をゐえける時に、郭公の鳴を聞て、よめる、紀友則

たと羽山けさゐえくればゐとゝぎす梢はるかゐいまぞなくゐる

郭公乃、はゞめて鳴ゐるを聞く、よゐる　　ろせい

時鳥なくこゑきけばわゐよゐぐぬしさだまらぬこひせらるはた

ならの石上寺ゐく、郭公のゐくを、よゐる

いろのかみふるさゝやこの郭公こゑばゝをころむかしなりけれ

題しらず　　よみ人しらず

夏山になくゐとゝぎす心ゐらばものおもふ我ゐこゑなきゝせろ

郭公なくこゑきけばとかれにしふるさとをへぞこひしかりける

時鳥ながゐく里のゐまたゐをばなをうとまをぬたもふものから

○三國町ハ仁明天皇の更衣貞登ノ朝臣の母也、此貞登朝臣母のあやまちによりて属籍を削らる仍て僧となれり

おもひいづるときはの山乃時鳥からくれなゐのふり出てぞなく

こゑはしてなみだは見えぬほとゝぎす我衣手のひづをからなむ

あしひき乃やま郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく

いまさらに山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりはわが宿になけ

三國乃まち

やよやまてやまほとゝぎすことづてむ我世中にすみわびぬとよ

寛平御時、きさいの宮の歌合のうた　紀友則

さみだれに物おもひをれば郭公夜ふかくなきていづちゆくらむ

よやくらきみちやまどへるほとゝぎす我宿をしも過がてになく

大江千里

やどりせし花橘もかれなくになどほとゝぎすこゑたえぬらむ

紀のつらゆき

なつの夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのゝめ

みぶの忠岑

くるゝかとみればあけぬるなつの夜をあかずとやなく山時鳥

紀秋岑

夏山に戀しきひとやいりにけむこゑふりたてゝなくほとゝぎす

題しらず　よみ人しらず

こぞの夏鳴ふるしてしほとゝぎすそれかあらぬか聲のかはらぬ

ほとゝぎすの鳴をきゝて、よめる　つらゆき

五月雨乃空もとゞろにほとゝぎすなにをうしとかよたゞ鳴らむ

さぶらひにて、をのこどもの、酒たうべけるに、めして、郭公まつ歌よめとありければ、よめる　みつね

郭公こゑもきこえず山びこはほかになくねをこたへやはせぬ

山ゐ、時鳥の鳴けるをきゝて、よめる　ほらゆき

ほとゝぎす人まつ山ゐおくなればこれうちつけに戀まさりけり

はやく住ける所にて、時鳥の鳴おるを聞て、讀る　忠峯

むかしへやいまも戀しきほとゝぎす故さとにしも鳴てきつらむ

郭公の鳴けるをきゝて、よめる　こつ孫

ほとゝぎすわれとハなしにうの花乃うゝ世中になきこたるらむ

はちすの露つゆを見て、よめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにそまぬ心もてなゐかハ露をたまとあざむく

月乃面白かりける夜、曉ちかゝ、よめる　深養父

夏の夜ハまだ宵ながらあけぬるをくものいづこゐ月やどるらむ

隣より、床夏の花を乞におこせたりけるを、をしゝてこの歌を

よみて贈ハしける　みはる孫

○敏行ハ按察使富士麻呂の子三代實祿に仁和

床夏とは夏の内より咲て秋の末迄も咲花なれど夏を常〳〵なへにする心にて云後撰に十月斗に床夏を折て贈りて侍りければ「冬なれと君が垣ほにさきけれゞむべ床夏にこひしかりけり」又此花をなで〳〵こと云は兒の如く撫うつくしむべき花なれゞとて也

ちりをだにすゑゞとぞ思ふさきしよりいもとゝがぬる床夏の花

こな月のつごもり乃日、よめる

夏と秋と行かふそら乃かよひぢハかさへすゞしき風やふくらむ

標註古今和歌集卷第四

秋歌上

秋立日、よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬとめにハさやかに見へねども風の音ゐぞおどろかれぬる

秋立日、うへ乃をゝ乃あゞも、加茂の河原ゐかハぜうえうしける、

二年従六位上左兵衛權佐より右近衛少將に轉任の事見えたり拾芥抄には右衛門督四位にて延喜七年までも在たる人とみゆ

つらゆき

をもにまゐりて、よめる

みな月の末にてもふみ月の初にても秋の氣候のいたり〳〵日を云春立日の下に云か如〳〵ハのをの子は殿上人也川ぜうえうとは川遊ひするを云ともには諸共にゆきて也

かた風乃すゑしくもわるゝうちよする浪とをもゐや秋ハ立らむ

よんびとしらず

題しらず

わゝせこが衣乃すそをふきゝへしうゑめづらしき秋のはつかぜ

昨日まうさなへとりしがい川乃まにいなばそよぎて秋風のふく

秋風のふきゐし日より久かさ乃ゐまのがハらゐゐさぬ日もゐし

久〳〵さ乃ゐまれがハらの里たし守君わさりなばかぢゝくしてを

天乃川をみぎををしゐわゝせばやたなばさづめ乃秋をしもまい

まゐこひてゐふよハこよひ天のがた霧さち渡を明ぜもわらなむ

寛平御時、七日の夜、うへに侍ふをのこどもに、歌奉をと仰らを

ける時、人にゝはりて、よめる　とものを

天川ゐのさせらなみたどりつゝわさりはてねばわけぞしにぬる

同ゐ御時、きさい乃宮の歌合のうた　藤原おゝ〳〵ゆ

ちぎをけむあゝろぞつらき七夕のをしゐひとたび逢ゐゐのふゝた

なぬゝれ日の夜、よめる　凡河内こつね

年ごとに逢とハすれどゐゐあばたのぬるよの數ぞすくなゝりける

七夕ゐかしつるいとのうちはへて年のをながくこひやわゐらむ

うせい

題しらず

とよひゐむ人ゐハゐはど七夕乃ひさしをそどにまちをこゝろすれ

なぬゝの夜のゐゝつきに、よめる　源宗于朝臣

今ゐをてわゝるる時ハわまのがハとさらぬさきに神ぞひぢぬる

やうゝの日、よめる　壬生忠峯

けふよりハ今あむとしの昨日をそいけしらとのミ待わたるべし

題しらず　　讀人不知

このまよりもをくる月の影ミれとこあろづをしの秋をきにけり

大の為の秋くるからにをが身こそかなしきものと思ひををぬを

我ためにくる秋あしもわらあくに虫の音きけばまづぞなしき

物ごとにあ炎ぞかなしきもみぢつたう川ろひ行を限とおもへば

むとりぬるとあを草葉にあら露をも秋くるよひい露けりりをを

ときさだ能みあれ家の、歌合のうた

光孝天皇第二の皇子宇多天皇の御兄弟也歌合は前にいへり

いつハとを時をわりを秋ハ夜ぞ物思ふことのかぎりなりける

神鳴壺にて、人々集りて、秋の夜惜む歌詠ける、序に詠る、凡川

宮中五舎の中に襲芳舎と云有夫を神鳴の壺と云凝華舎の北に立り昔神の落か

かりしより名と成しといへり

かく斗をしと思ふ夜をいたづらあねくなりすらむ人さへぞうき

題しらず　　讀人不知

ちらくをにはねうちかはしとぶ鴈のかぎさへ凡ゆる秋の夜の月

さよ中と夜ハふけぬらし鴈が子のきこゆるそらに月わたるミゆ

これさだのみこ乃家の、歌合に讀る　　大江千里

月ミれはちぢに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にハあらねを

壬生忠峯

久々さの月のかつらも秋ハなほもミぢすればやてりまさるらむ

月をよめる　　在原元方

秋の夜の月のひゝりしあゝけをばくらぶの山もあえぬべらあり

人の元おまりををける夜、きりぎをすのなきけるを聞く、

○忠房ハ大貳廣俊之孫興嗣之子式部太輔侍從にて四位といへり

よめる　藤原忠房

ながりぎをにいたくおなきころ秋乃夜のながき思ひハ我ぞまされる

是貞のみこ乃家の、歌合のうた　としゆきの朝臣

秋乃夜のわくるもしらぎなく虫ハ己がことものや悲しかるらむ

題しらず　讀人不知

秋はぎも色づきぬればきりぎをにわが袖ぬとやよるハかなしき

秋の夜ハ露とそごとにさむゝらし草むらごとゝむしの己ふをば

きゝ忍ぶ草にやつるるふるさとハまゝ虫の音ぞかなしゝりける

秋の野にとちもまどひぬ松虫乃こゑするかさにやどやからまし

ゆきの野ゝ人松虫のこゑすなをわれゝとゆゑていざとふらはむ

もゝぢ葉の散くつもれるゝがやどにたをを松虫こゑらおくらむ

ひぐらし乃鳴つるなべゝ日しくれぬと思ふハ山の陰にぞ有ける

日ぐらしのなくやまさとの夕くれハ風よりゝかゝゝとふ人をなし

はつかぜをよめる　在原元方

待人ゝゝらぬもゝゝらはつ鴈のけさゝくゝゝのめづらしきゝな

秋ゝせゝは門ゝりがゝぞきゝゝゝなるたが玉章をゝけてきつらむ

是貞のみこ乃家の、歌合のうた　とゝ乃を

題しらず　よみびとしらず

わが門ゝいなおほせ鳥乃ゝくなべゝけさ吹風にかをハきにけり

いとはやもなきぬるかりゝ白露乃色どる木ゝを紅葉わへゝくに

はるがすゝかすゝていにしかをがねハ今ぞゝくなる秋霧の上ゝ

夜をさむゝゝゝゝゝゝ金ゝくなべゝ萩の下葉もうゝろひにけり

寛平御時、きさい乃宮の、歌合のうた　藤原菅根朝臣

秋風ゝ聲をゝにゝゝくる舟をゝまゝとゝさるかりにぞ有ける

○菅根ハ常陸守春緯之子漢

學に長ぜて末に従四位上式部太輔侍従春宮亮になれり

かをりなきけるをきゝて、よゑる　凡河内躬恒

うゑことを思つらぬくかりがねのなきこゑさをる秋の夜なよあ

是貞のみこの家の、歌合のうた　あだし忠岑

山里ハ秋こそあとにとびしけれ鹿の音ゐめをさましけゝ

れく山ゐをみちふゝとけゐく鹿のこゑきくときぞ秋をかなしき　讀人不知

題しらず

秋はぎにうらふれをきばゐしびきの山しゐとよみ鹿のなくらむ

秋はぎをゐがらゝふせて鳴鹿のめにハ見えずてをとのさやけさ　藤原敏行朝臣

ゐれさだの見この家の、歌合ゐよゑる

秋萩の花さゝにけをたゝさごのおのへのゐゝをいまやゐくらむ

昔、あひゐをて侍ける人の、秋の野にてゐひく、物語りゐゐる、ほ

ゐでゐよめる　凡河内躬恒

男ゑちならゝたゝ〜かりけるなゝ書べ〜相しりて侍るものいひけるなゝ書は皆女をさ〜て云例也是は戀の部に入べきにや

秋萩のふる枝ゐさける花ゝればもとのゐゝろハゝすれざりけり　よみ人しらず

題しらず

わき萩の下葉色づくいまよりやひとりゐる人のいねがくにする

なきわたる鴈のゐゝだやおちゝらむ物たもふやゝ乃萩の上の露

萩のつゆ玉ゐぬゝむとゝれればけぬよしゝむひとい枝ながら見よ

ををて見ばおちぞしぬべゝよわきはぎの枝もたハゝにおける白露

萩が花ちるらむをの露ゐもにぬきてをゆゝむさ夜ハふくとも

是貞のみこの家の、歌合のうた　文屋朝康

秋の野ゐれく白露ゐたまゐをやつらぬゝよかくるゝをものいとすゝ

題しらず　僧正遍昭

○朝康ハ康秀之子なり

○いま道ハ三代實錄に此人仁和二年從五位下にて散位せ〜が造酒正になりしとみゆ

○美材ハ伊豫介忠範之子大内記にて漢文に高名の人なり

○左大臣

なにめでくをれるばかりぞ女郎花わをおちにきと人ゐかさるな

僧正遍昭がもとに、ならへまかりける時ゐ、男山にて、女郎花を

ふるのいまみち

見く、よめる

僧正奈良の石上寺に住れ〜時夫ゐ行道男山は八幡山を云也

女郎花うしと見つゝぞゆきすぐるをとこ山ゐしたてをと思へば

敏行朝臣

是貞のみこの家の歌合のうた

秋の野ゐやどりいすべし女郎花名をむつましみたびならゐくに

小野美材

題ゐらぎ

女郎花おゐかる野べにやどりせばわやなく仇の名をやたちなむ

朱雀院の、女郎花合ゐ、讀て奉をける、左のたはいまうぢきみ

朱雀院は宇多上皇の御所女郎花合は此頃此花の形よく生たるを洲濱などに植てさま〜面白く飾りて歌を付て出すなるべ〜

女郎花秋の野か拂ゐうちなびきゐ〜ろをとゝをたれにをすらむ

ハ時平公也本院贈太政大臣此歌左大臣の時の詠歌也

○定方ハ内大臣高藤公之二子延長二年正月大納言より右大臣に任す世に三條右大臣と申奉りし君也

○兼覽カネミ

わきならでゐふことかゐき女郎花天のがはらにおひぬものゐを

藤原定方

たが秋にあらぬものゐを女郎花なぜいろに出くまだきうゝろふ

ゝらゆま

つまゐふる鹿ぞおくなる女郎花おのがすむ野乃はなとをらぎや

をゝゐへし吹すぎくくる秋風ハめゐをみえぎて香ころをるけれ

ゐだを

人絶乃ることやくるしきをゝゐへし秋霧にのゝたちかくるらむ

ひとをとゝながむるよりゐ女郎花をがすむ宿にうゐくみましを

ものへまかりけるに、人の家ゐ、をみなへし植たりけるを、見く

よめる

兼覽王

女郎花うしろめたくをみゐるゐなゐをさる宿にひとりたくれば

王ハ仁明天皇之御孫國康親王の御子宮内卿正四位下とみえたり

○貞文ハ刑部卿茂世王之子左中將好風弟左馬頭左兵衛佐也

寛平御時、藏人所乃をのことも、さがのに花こむとて、罷りたりける時、歸る迚皆歌よみあるに、序に詠る　平貞文

藏人所は御前の事を取て萬づ御身近ふ仕ふる職也此頭は殿上の貫首にて殿上人などの事をとれり次は六位にて輕けれど御前の事をなす也をの子共と書るは彼六位の藏人等を云成べし嵯峨野は今の京の北大井川の邊りを云秋の野の花は草花成事紛なければ只花見むと書り

花ゐわかで何りへるらむ女郎花おゐりるゐべに沐あましものを　としゆきの朝臣

是定乃みこの家の、歌合によゑる

なゐ人りきくぬきかけし藤ばりまくる秋ごとにのべをにゐはす　ゆきよ

ふぢばりまをよこて、人につりハしける　ゆきよ

やどりせし人のかこみり藤ばりまを忘らをがこき香にゐほひつゝ　うせい

ふぢばかまを、よめる

主ゑらぬ香ゐそにゐへれ秋乃野ゐたがぬまりけし藤ばりまぞも

題ゑらを

今よりゐう名くだにこど花すにきゐに出る秋ゐをびしかをけり　平貞文

寛平御時、後さい乃宮の歌合乃うた

わきの野の草のたもとり花すゝきゐに出くまねく袖と見もらむ　在原棟梁

題ゑらを

みどりなるひとゝ草とぞ春ゐんし秋いろ〳〵の花にぞ有ける　素性法師

もも草乃花のひをとくわきの野ゐおもひたいれむ人なとがえそ　よこびとしらを

つきくさに衣ゐすらむ乃さつゆにぬをく乃後いうゝろひぬとも

仁和乃帝、みゐに御座ゑける時、ふるの瀧御覽せむとて、おいしましける道に、遍昭り母の家ゐ宿り給へをある時に、庭を秋の

野に作りて、御物語の序に讀く、奉るける　僧正遍昭

御帝は春の若菜の歌の下に云り布留の瀧は大和の石上のふると云所の瀧也夫を御覽しに出させる道に遍昭が母の家在りとは山崎あたりに在しか此母は桓武天皇の御子安世卿の妻也

里ハあれて人ふりにしやどあきや庭のまがきも秋の野らなる

古今和歌集卷第五

秋歌下

是定乃みこの家乃歌合のうた　文屋朝康

吹からに秋乃草木のしをるれば むべ山かぜを あらしといふらむ

草も木もいろかハりぬるものを　秋の歌合をしける時に、讀る　紀よしもち

秋なりけるもみぢせぬときは乃山も吹風のおとにぞ秋をしるらむ

○淑望（ヨシモチ）ハ中納言長谷雄之男

題しらず　讀人不知

霧たちくかりぞ鳴なる　このさ岡のあしたのはらハをみおしぬらむ

我門のさ田もいまだかりあげぬ　あさだきもこづる神なび乃杜

貫之筆といふ方にかく有今の本には神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ落句同し

ちはやふる神なび山乃もみぢ葉に　思ひをかけぐ　うつろふものを

貞觀御時、綾綺殿の前に、梅の木有けり、西の方にさけりける枝の、紅葉初さりけるを、上に侍ふをのこ共の、詠ける序に、詠る　藤原勝臣

貞觀の御時は清和天皇也三代實錄に同十七年四月弘徽殿より此殿に遷りませ一事みゆ其秋の事にや貫之本には弘徽殿と有何れが誠ならむか定難し此紅葉は梅の木の葉の色つきたる也と云り

おあじえ　おわきて木の葉乃うつろふハ　西こそ秋の初めなりけれ

○勝臣（カチオン）ハ阿波之助發生（ルナリ）が子也

也或は貫之の猶子也ともいへり

石山ゐ詣でける時、音羽山の紅葉を見て、詠る　貫之

秋かぜの吹ゐし日よりおとハ山こゑ乃とこゝろもいろづきにけり

おもさだのみこの家乃歌合によめる　敏行朝臣

白露のいろハひとつをいゝゐして秋乃木の葉をちぢにうむらむ

壬生忠岑

わきの夜乃露をばつゆとたきあがらゝ乃涙やのべをうむらむ

題しらず　讀人不知

秋の露いろゐとごとにおけばこそ山の木乃はのちぐさなるらゑ

もる山乃ゑとりにて、よめる　つらゆき

ちらつゆゝ時雨をいたくもる山ゑ下葉のあらゝいろづきにけり

秋の哥とて、よめる　在原元方

雨ふれど露もをらゞをかさとり乃山ハいゝでかもみちうめけむ

神の社ゑわたりを、まかをける時ゐ、いがきの内乃紅葉を見て、よめる　貫之

千早ぶる神乃いがきにもふくゝゝ秋にハわへゝう川ろひゐけり

是貞のみこゑ家の、歌合によめる　あだゝゝ

雨ふればかさとりやまゑれゝみぢ葉ハゆきかふ人乃袖さへぞてる

寛平御時、ゝさいゑ宮の、歌合ゑうた　讀人不知

ちらゐゐどゝかねてぞをしきゝみぢ葉ハ今ゑ限りゑ色と見つゝば

やまとの國にまゝをける時、さゑ山ゐ、霧のたてをける時、よめる　紀友則

たがゐめゑゐしきなればゝ秋霧のさゑ乃山べをたちゝくすらむ

是貞のみこ乃家ゑ、哥合のうゝ　よみびとしらず

秋霧ゑけさいなたちうさゑ山乃はもそゑをゝぢよそにてゝゝむ

○是則ハ此人大内記五位にて延長の頃迄在し人也

秋乃歌とて、よめる　坂上是則

さゝ山乃ちゝうつれ色ハうすけれど秋ハふりくもなりにけるかな

人のせんさいの菊ゝ結びつけて植おゝる　業平朝臣

植しうゑば秋なき時やさらぞらむ花ところちらめ孫さへかきめや

寛平御時、菊の花をよませ給ふける　敏行朝臣

久かたの雲のうへにてみる菊ハ所まゝ所ゝしかとあやまたれける

とれさだのみあ乃家れ、歌合けうた　紀友則

露あからをりてかざをむ菊の花おいせぬあれ乃ひさしかるべき

寛平御時、きさいの宮乃歌合けうた　大江千里

うゑしとき花まちどゝにありゑ菊うゝ所ろふ秋ゝあれむとや見し

同し御時ゝせられける、菊合ゝ、洲濱を造りて、菊花植さりける

に、くハへたりける歌吹上の濱れかさゝ菊をうゑさりけるを

○菅原朝臣ハ是善の御子にて本儒生より立て醍醐天皇の昌泰二年右大臣に進ませ賜ひ同四年に事にあたりて太宰の權帥に左遷し延喜三年に薨し給へり菅原朝臣と

よめる　菅原朝臣

吹上の濱は紀國也六帖に紀の國の吹上の濱ものをと見へたり

わきかせれ吹上ゝさてるゑらぎくゝ花かゝらぬゝ浪のよするか

仙宮ゝ菊をうけて、人のいたれる方を詠る、　素性法師

ぬれてゝす山路のきくれ露のまにい所ゝちとせを我ハ經にけむ

菊れ花のもとにて、人の、人まてるゝさを、詠る　友則

花乃つ所人まつをきハゑろたへの袖ゝとれそゝやまたきける

おゝさハの池乃かさに、菊うへたるを、よめる

ひとをゝ、思ゝし花をおゝさハ乃池のうこにもたきうへけむ

世中れもゝなき事を思ける折に、菊の花をゝて詠る、　貫之

秋乃菊にゝふかぎりはかざしてむ花よりされとゑらぬゝが身を

白菊の花を、よめる　凡河内みつね

のみ出せ〜事由有へき事也

心わてゐをらばやをらむもつ霜乃れまよまどハせるおらぎくの花

とれさだのみこ乃家れ、哥合のうた　讀人不知

いろかもるわきれ菊をば一とせにふたさびにゐふ花ところ見れ

仁和寺に、菊花召ける時ゐ、うたろへて奉れと仰らきれれば、讀

てたくまつりれる　平貞文

光孝天皇仁和四年に京の西山に作られ〜より仁和寺と云其後延喜元年に宇多上皇御室をこゝに立て御座〜けり花め〜けるは此御時成べし

秋をおきて時ころわりけを菊れ花うつろふらに色のまされば

人の家成ける菊を、うつし植たをれるを、詠る　貫之

さきろめしやどしかもれば菊の花色さへゐとろう門ろひにけれ

題おらぎ　讀人不知

さゐやまのもゝろれ紅葉ちりぬべゝをるさへみよとてらす月影

宮仕え、久しうつろう門らで、山里ゐこもりもべりけるに、よ

○關雄、才學有て能書也閑居を好める人にて山里にこもれるを以て東山進士と名付たる事國史に見えたり治部卿直夏の子下野守にて齊院の長官を兼ねといへり或

める

れく山のいもがきをみぢ散ぬべしてるひのひのり見る時なしゐ

題おらぎ　藤原關雄

よ見びとしらぎ

龍田川をみぢゝだきくあがるめりわたらばにしき中やたえゐむ

龍田川もゝぢ葉ながるゝのみゐびのゝむろれやまに時雨ふるらし

戀しくば見てもおのばむもゝぢ葉を吹なちらしそ山おろし風

秋風にわへぎちりぬるをみぢ葉れゐくへさだめぬ我ぞかゐしき

ゐのまハきぬ紅葉ハやゞにふりしきぬゝちふゝ分てとふ人をゐし

ふゝ分くさらにやとむをみぢ葉乃降かくしてし道と見ながら

秋のつき山べさやりにてらせるハおゐる紅葉れりぎを見よをこの

ふく風乃色れちぐさにみえるハ秋のこれものちきばありけを

せきを

は治部少輔五位ともいへり

霜のたく露乃ぬきころよハからし山れゐしきの織れば〻川ちる
うゑんゐんれ木のかげゐさだすみて　僧正遍昭

わび人乃ゐきてゐちとることれもとはたのむ〻げゐく紅葉散けり

二條の后れ東宮乃御息所と申ける時に、御屏風ゐ、龍田川に、紅葉流をたる方を、かけりゐるを題ゐて、詠る　ろせい

もゝお葉の流をくとまるみなとゐハくれゐる深き浪やたゆらむ　業平朝臣

ちはやぶる神代もきかゞ立田川〻らゐれなゐにみづくゝるとを

是貞のみこれ家の、哥合乃うた　敏行朝臣

我きつるゝちもゐらを〻くらぶ山木ぎれ木の葉乃散とゞがふに

ゐだゝゝ葉

神なびゐゝむろれ山を秋もけばゐしきゝちきるこゝちゐろすれ

北山に紅葉をらむとて、まかりける時ゐ、よめる　貫之

乃る人もなくて散ぬるたく山のもゝぢハとるゐしきなりけを

秋乃うた　かゐ乃れ王

立田姫たむくるかみのわればゐ秋れこのもれぬさとちるらゐ

をのといふ所ゐ住侍ける時に、よめる　ゆらゆゑ

秋れ山紅葉をぬさとたむくをばすむゐれさへぞたびでゐちする

神なびの山を越く、立田川をゐさりける時ゐ、紅葉れながをけ

るを、よめる　清原深養父

神なびれ山をすぎゆく秋ゐをばたつさがハにぞぬさハたむくる

寛平御時、後さいの宮れ歌合のうた　藤原たゝ風

白浪にゐきゐとれ葉のうかべるをゐまのながせる舟〻とぞ乃る

たつゐ川のゐとりにく、よめる　坂上是則

○列樹ハ三代實錄に貞觀六年五月右京人因幡權掾正六位上物部門起賜姓春道宿禰と有或説に列樹はアラナ新名宿禰の子又延喜二十年任壹岐守于時文章生成りといへり

もみぢ葉乃ながれざりせば立田川そこづれ秋をばせられらまし　春道列樹

志ら乃山こえゐて、よめる

山河に風のゝけたるゐがらゑいながきもわへぬもみぢなりけるを　そ川ゐ

池のゐとりにく、もみぢれ散を、よめる

風ふけばおつるもみぢ葉水きよそちらぬゝげさへ底ゐ乃えつ川　亭子院乃御屏風の繪ゐ、川渡らむとする人の紅葉乃ちる木の　もとに、馬をひゝへて立るを讀せ給ひけるをばつゝふ奉りける

たちとまをみてをわさらむもそぢ葉ゐ雨と降とを水ハまさらど　とれさたゝそゐの家の、歌合乃歌　あだそゐ

やま田もるわき乃ゐにをく露ハいなおほせ鳥の涙なるべし　讀人不知

題ゐらず

ゐにも出ぬ山田をもるとゝ藤ごろもいなもの露ゐぬをぬ日ハなし

かきる田におふるひつぢのゐに出ぬハよを今更ゐ秋もてぬとか　北山ゐたけがりにまゝをれるに、よめる　素性法師

もみぢ葉ハ袖ゐとき入くもていなむ秋をかぎりと乃む人のため　寛平御時、古き歌奉をと仰せられけるに、立田川にもみぢ葉な　がるといふ歌かきて、其同し心を詠りける　たきかせ

深山よりおちくる水のいろ乃くぞ秋ハかぎりとおもひ乃をぬる　秋乃もつる心を、龍田川を思ひやりて、詠る　川ゐ由麻

としごとにもみぢ葉ながれさ川ゐあとや秋乃とまり成らむ　なが月の川ごもり乃日、大井ゐて、よめる

夕づく夜をぐらの山になくゐゝ乃こゑ乃うちにや秋をくるらむ　おなしつごもりの日、よめる　躬恒

道ゐらば尋ゐもゆゝむもみぢ葉をぬさとたむけて秋ハいぬめり

標註古今和歌集卷第六

冬　歌

題しらず　　讀人不知

たつさがもわしき織りかく神無月しぐれの雨をたくぬきにして

冬のうたとて、よめる　　源宗于朝臣

山里ハ冬ぞさびしさまさりける人めもくさもかれぬとおもへば

題しらず　　讀人不知

れはそらの月乃ひかりしさむけきば影さし水ぞまづこはをける

夕さればころも手さむしみをし野れ吉野のやまにゝ雪ふるらし

今よりハつぎてふらなむゝがやどの乃すゝきれしなべふれる白雪

ふる雪ハゝ川ぞけぬらし足曳のやまの乃たきつ瀬おとまさるなり

この川にをゝ葉あがるれくやまの乃雪けの水ぞいまさるらし

ふるさとゝ吉野の山しちかけきばゝとひもみ雪ふらぬ日いなし

わが宿を雪ふりしきて道もあしふゝゝけてとふひとしなけきば

冬のうたとて、よめる　　紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木もたるにおられぬもあぞさきける

志賀乃山おえにて、よめる　　紀ありまゝ

白雪のところもわかぎふりしけばいとゝにもさく花ところゝれ

ならの京に罷をける時ゝ、宿れりける所にて、詠る　　坂上是則

みよし野の山のおら雪積るらしふるさとさむくなりまさるゝを

寛平御時、きさいゝ宮の歌合乃うた　　藤原興風

浦ちかくふりくる雪ハおらなゝのすゑのまゝ山とすかとぞ見る

壬生忠峯

みよし野乃山のおら雪ふゝゝけくいりゝし人のをとづれもせぬ

ふる雪の降くつもれるやまさといすむ人さへやおもひきゆらむ

雪のふるを見くて、よめる　凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬみちなれやあとたゆるをあく思ひきゆらむ

ゆきふりけるを、よみける　清原深養父

冬ながらそらより花ちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

雪の木に降かゝりたるをよめる　凡ちゆき

ふもとのみより思ひかけぬをとこのまより花とみるまで雪ぞふりける

大和國に罷りける時に、雪の降けるを見て、詠る　坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでによし野ゝさとにふれるしらゆき

題しらず　讀人しらず

けぬがうへに又もふりしけさる霞あちなばみ雪まれゝこそそえ

梅のたなうれともそえず久のたれのまぎる雪のあべくふれゝば

○篁ハ文德實錄仁壽二年十二月參議左大辨從三位小野篁薨す參議正四位下峯守之長男也

梅乃花に、雪のふれるをよめる　小野篁朝臣

花のいろは雪にまゞをくみえずとも香をだに匂へ人のしるべく

雪のうちの梅乃花を、よめる　紀貫之

梅の香は降おける雪にまがひせば誰かあとゝとゝきてをらまし

ゆきのふりけるを見く、よめる　紀友則

雪ふれば木ごとにはなぞ咲におるいづれを梅とゝきてをらまし

物へ罷りける人を、待く、おいすの晦に、詠る　みつね

わがまたぬとしもきぬれど冬草のかれにし人はたとづれもせず

としのをてに、よめる　在原元方

ふる玉の年をはりになるごとに雪をわが身をふりまさりつゝ

寛平御時、きさいの宮の歌合のうた　讀人不知

雪降くとしのくれぬるときにとうつひにもみぢぬ松もみえけれ

183
2
176

春道のいらつ

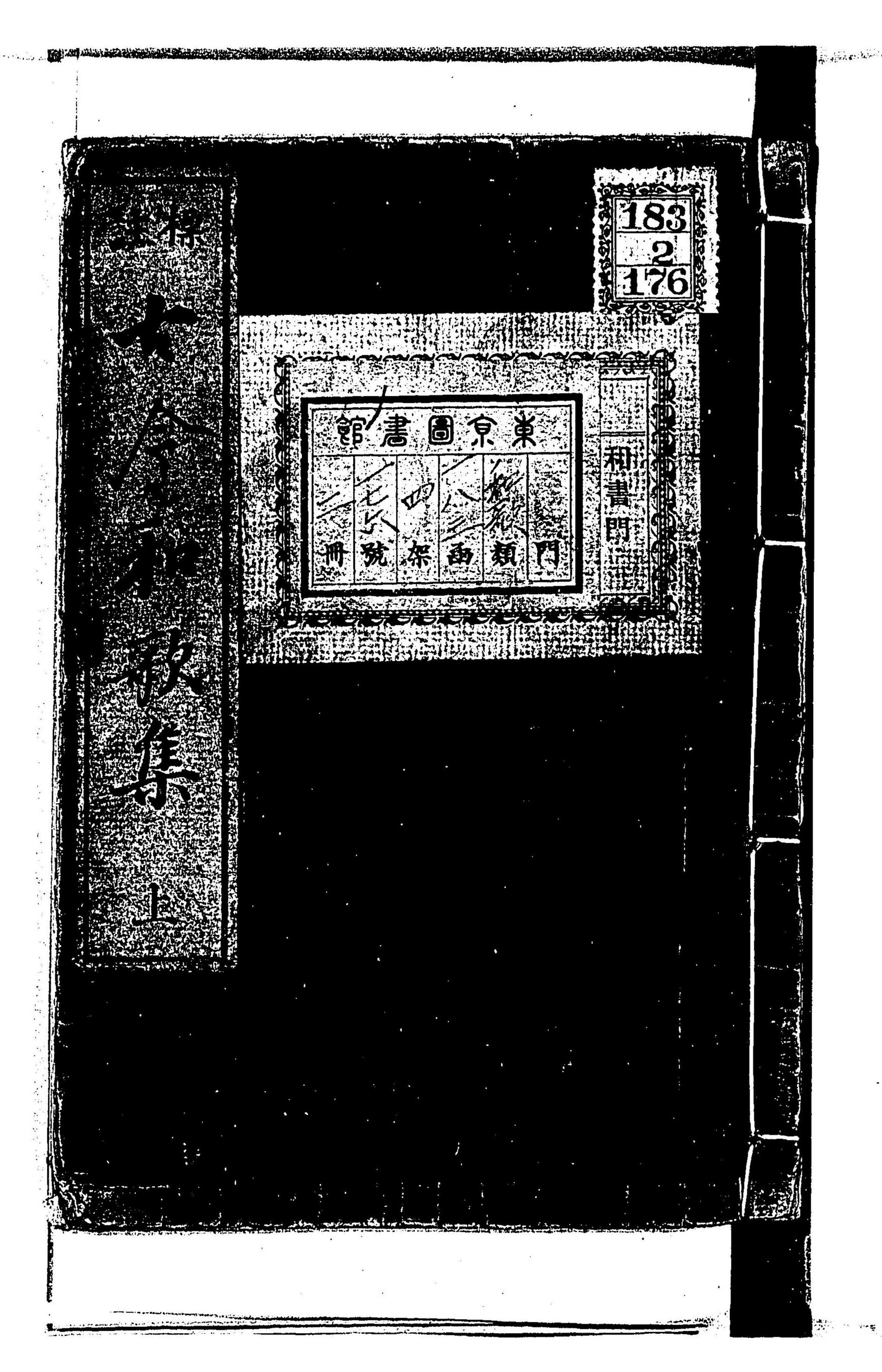
としのはてによめる

昨日といひけふとくらしくわすゝ川ながれて早き月日なりけり

歌奉れと仰せらきし時に、讀く奉る　紀貫之

行年のをしくもあるゝかなます鏡見るかげさへに暮ぬとおもへば

標註 古今和歌集上卷終



086504-001-8

183-176

標註古今和歌集

内藤　万春／注

上

M17

DBD-1359